和歌山市立東中学校

令和７年度全国学力・学習状況調査結果の概要と具体的な取組

調査内容

実施日：令和７年４月１７日(木)　実施対象：３年生　６学級　２０３名

出題範囲は、調査する学年の前学年までに含まれる指導事項を原則とし、出題内容は、次の①と②を一体的に問う。 ①身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能　等 ②知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力　等

教科調査の結果分析より

≪国語科の調査結果に見える本校生徒の傾向≫

平均正答率が、全国は同じ、県比+２、市比+5 である。無解答率は全国+0.3 上回り、県は−0.5、市は+5 である。全体的に無解答率は全国並みであり、学力と解答意欲の高さが伺える。

■課題①

全体的に高い正答率を保っている。全国比で+5 近く上回っているのは、「自分の考えを明確になるように構成する力」が優れている。正答率+5 以上全国より低いものはないが、3 ポイント前後のものが散見される。

平均正答率	
本校	５４
県	５２
全国	５４

■課題②

無解答率が 0.5 以下の問題が 9 問／14 問である。無解答率 30%を超える問は、(３四)(４一)である。全国比を考慮すると(４一)は全国と同等であり、本校の課題は「他者を起点とする問い」つまり【相手が何をどう考えているのかを根拠をもって答える問い】が考えられる。

■課題③

県比において記述式の問いに対して苦手感が見て取れるが、正答率と無解答率を鑑みるに、決して能力がないわけはなく、日常的に作文活動の機会が少ないのではないかと考える。

≪数学科の調査結果に見える本校生徒の傾向≫

平均正答率は、全国比は同じ、県比は+3、市比は+7 である。無解答率は、全国比+2.5、県比 0.6、市比は 2.1 であり。総じて全国と同等の正答率である。

■課題①

数と式は、正答率は全国比−4.2、県比−0.7、市比+3.1 と県平均並みの力を示している。図形、関数、データの活用は、全国比−2〜+4、県比+4〜6、市比+3〜10 と全国と拮抗している。

平均正答率	
本校	４８
県	４５
全国	４８

■課題②

無解答率が高かったのは、8(2)全国比+7.2、9(3)全国比+6.7 である。9(3)の正答率は全国比+2.4 であり、本校としては、二極化していることが伺える。この状況から数学的な証明は得手が悪いことがみられる。

■課題③

どの分類においても全国人遜色のない結果を示している。今後の更なる方向としては、全国的な傾向である「数学的な思考」をどう学び、どうのように表現するかが学力向上の大きなポイントである。

≪理科の調査結果に見える本校生徒の傾向≫

理科は IRT スコアにおいて、全国比−28、県比−8、市比+10 であり、県相当の力を示している。

■課題①

無解答率は数値上、+0.3〜1.2 の範囲にあり全国平均と遜色ない。正答率は多くが全国比−3〜−6 の範囲で下回っている。理科全体のわずかな理解不足がみられる。

■課題②

特に顕著なのが 1(5)で−21.3、1(1)−6.7 を示し、1(4)−6.8、3(2)−6.8、4(1)−6.0 などが低い傾向を示す。分野は違えども、概念の言語化や数値化に関わるところであり、抽象概念の理解や言語化に課題がある。

平均正答率(IRT スコア)	
本校	４７２
県	４８０
全国	５０３

■課題③

2(2)のような資料や情報を判断してまとめる問いは−3.6 と全国に引けを取らない数値を示している。これは、本校生徒の学力が決して低いわけではないことを示している。

IRT についての詳しい説明等はこちら【文部科学省 HP より】

質問調査の結果分析より

生徒質問調査は、生徒の学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査です。

≪生活習慣・挑戦心・自己有用感について≫

生活習慣は肯定的な意見が全国よりも高い傾向でみられる。自己有用感、学校内での幸福度や友人関係の満足感は、全国と比べても高い。相談相手も全国値よりは、高い数値を示している。対して、全国に比べ将来の夢や目標は低い傾向がみられる。

≪学習に対する興味・関心・理解度について、家庭学習、社会への関心≫

学習への興味や関心は全国比よりも−10 低い(理科に至っては−30 を示す)。しかし、内容の理解度は、国語は全国比+1.4、県比+1.0、　数学は、全国比+7.4、県比+4.0、と高い数値を示す。ただし、理科への理解度は、全国比−27.8、県比−25 と苦手意識が見える。興味を持つことが、学習の言動旅行となる傾向がみられる。また、一週間の家庭学習時間は全国比+3.4 と同等であるが、タブレット活用時間は、全国比−4.5(月～金)、−8.5(土日)と低い数値であり、アナログな学習による学力向上がみられる。。

≪授業方法の工夫改善について≫

タブレットの使用は全国比−36.5 と非常に低い。しかし、発表を工夫する機会−1.4、自ら取り組む態度−0.2、話し合い活動−4.5、と県や市を上回り全国に迫る数値を示している。学習手段が、アナログではあるが、対話的・主体的な学びを生徒が実感しているところである。

≪部活動、地域活動について≫

地域への貢献意欲も全国比−11.9 とともに社会への関心は低く出ている。学校の部活動への参加率や意欲が高く、社会・地域活動に対しては、関心はあるが部活動が優先になっているといえる。新聞については全国比−4.2 と低いことも要因の一つではないかと考える。

※生徒自身がデジタル環境を自分の意志で主体的に利用・活用する力をつけましょう。学習に使用することだけでなく、遊びや私的に使う場合もの使い方を保護者と相談してください。
※同じ場所で違いのある人が互いを受け止め合うために、様々な考えや性質を受け止めるにはどうすればいいのかを話し合う習慣をつけてください。。
※情報を整理し、様々なことに興味・関心を持ち、自分の意見や根拠を言葉として表現する（発表や作文）習慣を持ちましょう。

調査結果を受けて、本校が具体的に取り組んでいくこと

※教科調査に見られた課題や質問の様子から改善が必要な事柄について具体策を記述する

≪学びの姿勢≫

〇本校生徒は授業に興味がなくても、しっかりと学習する力を持つので、基本能力は高い。夢や将来への意欲は比較的低い数値が出ていたので、学習の目的が見いだせていない。
自己有用感が低く、社会の中での自分を意識づけるのが課題である。教育の様々な場面を通じて、様々な社会での在り方を意識させる授業に取り組んでいく。

≪わかる授業づくり≫

〇昨年から、ユニバーサルデザインを組み込んだ生徒を主体的とした学びに取り組める授業・教室づくりに取り組んできたことの成果は出ていると感じるので、今後も教師がユニバーサルデザインを意識した授業経営を考えさせていきたい。

〇個別最適化の学習と協働学習を取り入れるためには、個々の学習が深化するためには集団での授業を生徒各自に共有、共感する意識を持たせる授業デザインを教員各自が磨き合う意識を持つ。

〇上記の 2 点を授業改善の柱とする。

≪自主的な家庭学習の推進≫

〇家庭学習において、宿題の持つ役割は大きい。しかし、やらされている宿題ではなく、自分自身が学びたいという課題の設定が重要である。自ら学びたいという意欲を活かした宿題づくり、それに至るための課題の設定についての思考が教師には必要である。

≪生徒が中心となる活動≫

〇本校生徒は、授業や部活動、生徒会活動などで生徒が中心となる活動ができる。しかし、前述したように自己有用感が高いが、それを社会と結び付けられていない。与えられる活動ではなく、生徒自身が立案する社会活動【学級→校内(部活動)→地域】を取り入れていく。